地球規模でつなぐという重要な役割を果たしている点を見逃してはならないでしょう。これは、二十一世紀の世界における、人間同士の文化的絆を強化することにつながります。つまりこれは、インターネットに「アメリカ化」とは別の意味での「グローバリゼーション」をもたらす可能性があることの証しである、と言ってよいでしょう。

そうは言っても、インターネットは「アメリカ偏向」に過ぎる、そしてグローバリゼーションは実は「アメリカ化」であると言う見方が、現実にインターネットの地球的な普及を妨げているという事実も確かにあります。そこで、インターネット・ソサエティーとしては、特に各国の代表の積極的な参加を促すことによって、今行なわれている国際ルール作りの作業がアメリカ人を中心に進められているような印象を与えないように注意しています。国際間の作業というものは、言葉の問題もあるため、決して楽ではありませんが……。

加藤　「アメリカは世界中にインターネット網を張り巡らせて、自己中心的なルールを作ることによって世界市場で独り勝ちすることを企んでいる」と考える人たちは、日本にもいます。アメリカは自信満々だから、市場を開放しろと手当たり次第迫ってくる。だから、日本側は自己防御のために市場を閉じることが必要だ、というわけですね。しかしこれは、現実には市場開放は日米双方を益するという点から見ても、間違っている。

インターネットの市場は、どう抗っても閉鎖することはもはや不可能です。電話線を切るわけにはいきませんし……（笑）。

それに、市場を狭めれば狭めるほど、国と国民が被る損害は大きくなってゆくのはまちがいありません。

ヒース　日本の企業文化の長所の一つは、長期計画を重視する点だと思います。アメリカの企業にとっては四半期ごとに収益を上げることが最重要課題なのですが、日本ではたとえば十五年計画のような長期計画も、むしろ「短期」に属すると考えられているようです。

私は、長期的ビジョンの重要性から考えても、日本のこうした企業文化の伝統のプラス部分は守られて行くべきだと思います。しかし、この情報革命の時代には即決主義がますます重要になっているのですから、日本企業は目の前の状況に、これまでよりはるかに素早く対応し、決断を下すことが求められています。

先進工業国が高品質で安価なものを作っていればよかったという時代はもう終わりました。八〇年代の日本は優れた創意と工夫を活かして、世界経済の活性化に大いに貢献しました。しかし日本は、時代が変わっても相変わらずあのころの物作りの技術に依存してきた。そのため、ＩＴ革命がもたらす新しい需要にまだ応じることができず、立ち往生をしているような状態だと思います。

だからと言って、ものを製造する努力を止める必要はもちろんありません。ただ、急展開しつつあるこの「ニュー・エコノミー」の恩恵に浴するような思考と行動のパターンへの、思い切った転換をすることは絶対に必要だと思います。世界経済にグローバルな変化が起こっているのですから、グローバルなビジョンで日本経済の活性化にコミットすることが、日本の各界の指導者たちに求められている。時間が勝負の時代です。素早く対応しなくてはなりません。

人類はもう後戻りはできない

――ＩＴ革命はわずか数年のうちに経済、社会、文化を含んださまざまな面に大きな変革をもたらしました。ＩＴの将来をどのように見ておられますか。

加藤　私はＩＴの持つ可能性は無限だと見ています。今後の五十年の間にそれが人類にもたらす恩恵は、想像を絶するものになるでしょう。ＩＴ革命の到来によって、人類の歩む方向は変わりました。そして、人類はもう後戻りはできませんし、後戻りする必要もないのです。

インターネットが素晴らしいのは、これまで人間を隔てていた物理的な距離を完璧に取り除いてしまったことにあります。例えば、インターネットがあれば在宅のままの状態で、世界のどこにでもアクセスできますし、物理的な「商品」以外は、何でも瞬間的に取り引きすることができるのです。

たとえば、外国人労働者に日本の労働市場を開放することに消極的な日本の場合、インターネットを使うことによって、海外に住む外国人の優れた能力やノウハウを無制限に「輸入」できるでしょう。そうすることによって、高齢化と少子化によって将来急速に失われることになる労働力を効果的に補うことも決して不可能ではない、と私は思っています。

ヒース　私も、インターネットには輝かしい未来があると確信しています。それが人と人、人と物、そして物と物との間のコミュニケーションを可能にするからです。と言うことはつまり、「ひと」と「電子頭脳」を埋め込んだ「物」が、インターネットで連結されるようになれば、「物」が人間のた